

パナマ運河工事に携わった 唯一の日本人 青山士 (あきら) 物語



人類400年の夢であったパナマ運河は25,000人という途方もない犠牲の上に完成した。しかし、この人類史に残る大事業に、一人の日本人が重要な貢献をしたことはあまり知られていない。それが青山士である。熱帯のジャングルを切り開く難工事は、黄熱病、チフス、マラリアとの戦いでもあった。そこへ好んで行く人はいなかった。しかし、青山は地球の反対側から出かけていったのである。

何が青山を突き動かしたのか。それは、名門一高在学中に、自らの人生をどのように使うべきか悩んでいたときにめぐりあった内村鑑三の講演、『後世への最大遺物』であった。その後、内村より聖書を学んだ青山は、土木事業こそ、自分が後世に残せる遺物である、と確信し、東京帝大工学部で研鑽を積むが、卒業を前に、地球上で最も大事で人類のためになる仕事はパナマ運河である、という結論に達した。

ただちに主任教授、広井勇博士の紹介状を携えて渡米、やがて明治36年から再開のパナマ運河工事に日本人としてただ一人、土木技師として加わり、次第に信頼と尊敬を勝ち得て重要な役割を任せられ、明治45年、約8割が完成したところで帰国した。日本人がわざわざパナマまで来たのはスパイ活動のためではないか、と疑われ、それ以上は留まることができなかったのである。

帰国後は国家的プロジェクトを指揮するようになった。その一つ、荒川の治水工事は、あまりにも大規模だったため、そこまでする必要はないのではないかと批判もあった。しかし、関東大震災でもびくともしなかったため、その正しさが認められた。太平洋戦争中パナマ運河破壊計画を海軍から相談されると、「私は造ることは知っているが壊し方は知らない」と答えたという。

「私はこの世を、私が生まれたときよりも、より良くして残したい(ウィリアム・ハーシェル)」という、座右の銘の通りの生涯であった。

今回は、世界と日本に多大の貢献をしたクリスチャン土木技師、青山士の生涯から学びます。

記

1. 日時：2016年1月15日(金) 10:30 AMより
2. 場所：ゴスペルホール(電話 026-295-6705)
3. 講師：尾崎富雄(ゴスペルホール代表)

入場無料。どなたでも参加できます。